脳と才能

連載第5回
酒井 邦嘉
東京大学教授・言語脳科学者

「真に偉大な人々は、優越感も劣等感も、もたない人々であり、向上心の中にのみ真実への道を歩いていった人々である」

『鈴木鎮一のことは心を育てる』 p.43
（公益社団法人性能教育研究会。2018年）より。
才能教育研究会本部事務局、東京事務所で販売中。アマゾンでも購入可。500円（税込）

鈴木鎮一先生のお言葉を紹介しながら、その奥義を科学で考えるという連載です。

才能教育研究会がめざす「才能」には、どのような意味が込められているのだろうか。そしてその才能は、脳のどんな働きに支えられているのでしょうか。

前回の連載で紹介した言語学者のノーム・チョムスキーは、「向上心の中にのみ真実への道を歩いていった」といった人物として知られています。 彼は、この向上心にこそ真実があると考え、才能を追求することが重要であると述べています。

学問や学校の勉強、そして人生の旅の中で、向上心が高いと、成功のキーとなると考えられています。向上心が高い人ほど、挑戦の精神が強く、成功を求めて前進します。だからこそ、向上心が高い人にこそ、才能の可能性が大きいとされています。

「才能教育研究会」は、才能の育成を目的としています。これには、向上心の育成が不可欠であると考えられています。向上心の育成は、たとえ失敗しても、そこで学んだことを思い出して次のステップへと進む力がなければなりません。言い換えれば、向上心は才能の育成のための重要な要素であるといえます。

『才能教育研究会』は、この向上心の重要性を念頭に置いて、才能の育成に取り組んでいます。その中でも、向上心の育成が大切であると考えています。向上心が高い人ほど、学びの意欲が高いとされ、また、挑戦する勇気が備わっていると言えます。

向上心を育むためには、挑戦の機会を提供することが重要です。そのためには、学校教育においても、挑戦的な課題を設けることが重要であると考えられています。これにより、向上心の育成がはかれることが期待されています。

才能教育研究会の活動は、向上心の育成を目的としています。このためには、挑戦の機会を提供することが重要であり、これにより向上心の育成が可能になると考えています。